The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	オノマトペについての日中対照研究 : 人間の行為に関する表現を中心に
Author(s)	薛, 鳴
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1987, 21, p. 43-60
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56484
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

オノマトペについての日中対照研究

——人間の行為に関する表現を中心に——

薛　　鳴

1　はじめに

本論に入る前にまず中国語のオノマトペについて論ずる。表意文字である中国語の擬態語を考えるにあたっては、その特徴を念頭において、それなりの基準を立てることが必要である。

漢字の構造としては、象形、指事、会意、形声、転註、仮借という「六書」がある。前の四つは造字法で後の二つは用字法である。さらに造字法を分類すると、象形、指事、会意が純粋たる表意語であり、形声は表音的部分がある。「用字法」の中の「仮借」は許慎のいう「本無其字、依声記事」(元来その字はないが、音によって事に託す)である。漢字にはこうした構造があるので、オノマトペ的な用法が可能であるわけだ。

次に擬態語と思われるものを挙げてみよう。

1.1　畳語

中国最古の詩集である『詩経』に畳語が多数用いられている。中にはオノマトペと思われるものがかなりある。それらの畳語は次のように分けられる。[1)]

畳語 ／ 象声詞 —— 物事の音を模写するもの。

交交黄鳥、鶏鳴喈々……

形容詞 ── 物事の様態を模写するもの。

風雨瀟々、桃之夭々、其葉蓁々……

ここで「形容詞」とされているものについて、これは物事の状態、性質を表す機能のことをいうに過ぎず、単字のまま用いられないから、音声面の制限があることが明らかである。それは形容詞の中の特殊な一群で、擬態語の特徴がかなり見られる。そこで、筆者はこの類の語を擬態語と呼ぶことにする。

このような畳語は現代語にも見られる。例えば、翩々、巍々、瀟々、喃々、津々など。現代語で使われる四字熟語で畳語の入っているもの、例えば、「戦々兢々」、「唯々諾々」、「兢々業々」などもそれである。

1．2　～然

「然」は大体擬音語または擬態語の後につく。形式としては単音節語のあとにつく「A然」と畳語の後につく「AA然」がある。例えば

嘩然、轟然、鏗然、喟然……　　翩々然、悻々然、飄々然……

ここの「然」は接尾詞で、中には日本語に入っているものもある。これについては金田一春彦（1978）と鈴木修次（1978）等の論述がある。[2)]

1．3　双声語と畳韻語

「双声語」は子音を同じくする熟語で、「畳韻語」は母音を同じくする熟語である。これもすでに『詩経』に出ている。例えば、現在でも使われている「参差」(can ci)、「猶豫」(yiu yu)、「憔悴」(qiao cui)（双声）や「窈窕」(yao rao)（畳韻）などがそれである。これらの双声、畳韻語は大体「音色形状」を表すのに用いられていた。これを古人は「連綿字」

と称して、それをもって詩の音楽的効果を求めていた。[3] 現代語でも「恍惚」、「唐突」、「玲瓏」、「悠揚」、「荒唐」、「朦朧」などの双声、畳韻語が用いられている。その音韻的特徴と用法から見れば「擬態語」と考えてもよい。日本語に入った部分も金田一や鈴木では漢語系の擬態語としている。[4]

以上挙げた三つの形式はいずれも古代に発生して、現代語にもそのなごりが残っているものである。それだけに文章語的に用いられることが多い。

次に近現代語に出たものを考えよう。

1.4 ABB型

これは造語法から次のように分けられる。

a 形容詞＋畳語　干巴々、冷颼々、黒洞々、硬邦々……

b 動詞＋畳語　笑嘻々、鬧哄々、哭咧々……

c 名詞＋畳語　水汪々、水霊々、眼巴々……

以上、「ABB」の「A」の部分が意味の主な担い手であるが、後に畳語がつくことによって「A」で示された性質、状態、感覚などがより完全で、身近になり、そしてリズミカルに響く効果がある。畳語の「BB」は「A」の補助成分である。しかも、ここの補助成分の意味は畳語の字意ではなく、音と響きで「A」を補っているわけである。声調的には一声（陰平）であるのが特徴である。また、「形容詞＋畳語」、「動詞＋畳語」の一部には「AABB」という形もある。（例えば、干々巴々、鬧々哄々、哭々咧々など）。

この類の言葉はほとんどの文法書では形容詞として扱われているが、呂叔湘主編の『現代漢語八百詞』の中では形容詞の「生動形」とされている。「擬態語」として差し支えない。

1．5　A里AB型

この形式は一部の二音節形容詞に「里」を挿入した形である。「里」はもとの意味がなくなったばかりでなく、声調も軽声に変わるのが特徴である。中国語で「嵌音」（音挿入）ともいう。「里」の入る形容詞は大体消極的な意味を含むもので、マイナス評価を表す。例えば、

羅嗦 ── 羅里羅嗦、胡涂 ── 胡里胡涂、慌張 ── 慌里慌張、迷胡 ── 迷里迷胡、など

1．6　その他

吊児郎当（diao er lang dang だらしない様子）
肋膩（le ta 服装に無頓着なさま）
（胡子）拉碴（ia cha　不精髭だらけの様子）
蔫不唧（nian bu ji　元気のない様子）
滑不唧（つるつる滑っているさま）
花不棱登（hua bu leng deng　柄が派手な様子）
花里胡哨（hua li hu shao　意味同上）
黒不溜秋（hei bu liu qiu　色の黒い様子）
黒咕隆冬（hei gu long dong　真っ暗な様子）
酸不溜丢（丢 diu 味が酸っぱい様子）

思いついたものをあげてみたが、かなり話し言葉的で、方言的な要素も入っている。しかもマイナス評価である。全体、或は一字形容詞の後につく部分が当て字的な使い方で、いずれも字意とは全く関係がない。[5)]

以上、主に中国語の中の擬態語と思われるものを挙げた。次から人間の

行為に関するオノマトペ表現の日中対照を試みる。

2　人間の行為に関するオノマトペ

オノマトペの収集には日本語は主に浅野編『擬音語、擬態語辞典』を用いているから、漢語系の擬態語が当然除外されることになる。一方、中国語は主に『現代漢語詞典』を用い、それに筆者個人の判断も加えて収集を行った。なお、日本語の場合は例えば「にこにこ」――「にっこり、にこり(と)、にこっ(と)」のように一つの基本形からいくつもの派生形があるが、本稿では上記の辞典の見出し語のみを対象とする。

2.1　笑う

日本語と中国語の「笑う」に関するオノマトペ表現を次に挙げる。

日本語

①にこにこ　②くくっ(と)　③うふふ　④くっくっ　⑤くすくす　⑥ふっふっ　⑦へっへっ　⑧にっ(と)　⑨にんまり　⑩にやにや　⑪にたにた　⑫へらへら　⑬けらけら　⑭けたけた　⑮げたげた　⑯げらげら

中国語

●1 笑吟々、笑盈々　●2 笑咪々　●3 楽陶々　●4 甜滋々　●5 楽滋滋、楽悠々　●6 笑呵々　●7 楽呵々　●8 嘿々笑　●9 嘻々笑、笑嘻々　●10 哈々笑、笑哈々　●11咯々笑（格々笑）　●12嗤々笑（吃々笑、哧々笑）

中国語の場合、括弧の中は同じ意味の違う表記である。（表記上のルーズさもオノマトペであることを物語っていよう。）以上挙げた表現の評価をそれぞれ日本人と中国人のインフォマント（日本人と中国人7名ずつ）に聞いた結果を次の図1にまとめる。

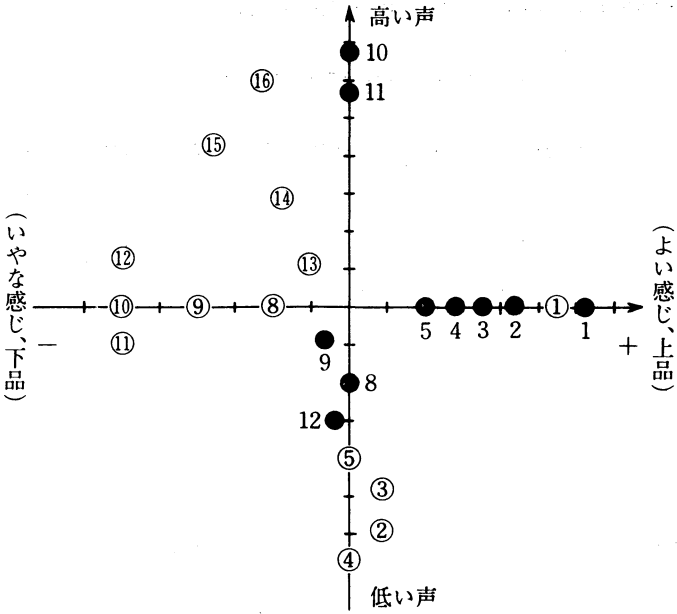

図1

図から見て日本語は左寄りで、中国語は右寄りである。評価の差異が現れている。また、日本語は中国語より声の高低に関してバラエティに富んでいることがわかる。声の高低は母音の口の開きの大きさに関係しているが、中国語の場合は四声とも関連している。四声の中で一声、「陰平」がもっとも声調が高いことは知られている通りである。前にも少し触れたが、擬態語の「ＡＢＢ」の「ＢＢ」の部分が常に陰平である。笑いに関する擬態語もすべて陰平であることが注目される。日本語に比べて低い声の表現に欠けている事実は翻訳の中でも見られる。

次に具体的に見よう。

まず日本語の場合であるが、音韻的に考えると、「ｅ」の音の入っているものが多い。この「ｅ」の音は、「多くはあまり品のいい形容とは言いがたいものである」と金田一春彦（1978）に述べられている。それはマイ

ナス表現が多いことにつながる。また、声の出ない場合は「にこにこ」を除いてマイナス評価である。大きい声もマイナス評価である。一方、中国語の場合はＡＢＢ型がほとんどで、「Ａ」は動詞の場合と形容詞の場合がある。前者は「笑、楽」で、「笑」より「楽」の程度が高い。後者は「甜、美」で味覚と性質を表す形容詞の転用である。このＡＢＢ型は様態に着目するから、擬態語的である。内心の喜びが顔に現れる様子の形容で、プラス評価がほとんどである。これに対して「ＢＢＡ」は声に着目するもののように思われる。「嘿々笑」は男性にのみ用いられるのに対して「咯々笑」は女性と子供に対して使われる。「嗤々笑」は笑いをこらえながら小さい声で笑う様子或は声である。また、中国語では古語の名残りである「莞爾」と「嫣然」があるが、いずれも女性の優雅な笑いかたを形容する表現である。しかし、全体的に見れば、中国語の場合はプラス評価が多いとは言え「笑い」をよいとする文化でもない。

中国語では次のような動詞によって、より細かい使い分けがなされている。

大笑、微笑、傻笑（ばか笑いをする）、憨笑（ばか笑いをする、無邪気に笑う）、奸笑（陰険に笑う）、偷笑、窃笑（こっそり笑う）、苦笑、慘笑（にが笑いをする）、嗤笑（人をばかにするような笑いかた）

これらの動詞の中で、「微笑」がプラス評価、「大笑」、「苦笑」、「憨笑」が中立、あとはマイナス評価が多い。ほかに四字熟語のような表現もある。例えば、「開懐大笑」（愉快に笑う）、「哄堂大笑」（大勢がどっと笑う）など。そのほか比喩表現もある。これについては日本語との対照が興味深いところであるが、別の機会に譲ることにする。

2・2　話す

日中両語の「話す」に関するオノマトペ表現を次に挙げる。

A　口数が多い

(1)　盛んにしゃべる様子

日．べちょべちょ、ずけずけ、つけつけ、ぽんぽん、べらべら、ぺらぺら

中．哇啦哇啦、呱嗒、嘰里呱啦、喋々不休、誇々其談、侃々而談、娓々(而談、動聴)、呶々不休

(2)　文句や不満を言う様子

日．つべつべ、ぶうぶう、がみがみ、ごたごた、ごてごて、ぶすぶす

中．唧咕、(唧々咕々)、唧噥（唧々噥々)、咕唧、嘀咕、嘟噥囔々

(3)　同じことを繰り返してしゃべる、或はとめどなくしゃべる様子

日．くどくど、くだくだ、たらたら

中．絮叨、唠叨、嚕蘇（羅嗦、羅唆)、哩々羅々

B　直接的

ずばずば（ずばり、ずばっと)、ぱっぱっ(と)、きっぱり、はっきり

C　口数が少ない或は不明確な話し方

(1)　無口な様子

むっつり、ぽつりぽつり

(2)　不明確なさま

日．ぼそぼそ、むにゃむにゃ、ぐすぐす、へともと、しどろもどろのらりくらり

中．支々吾々、吭哧（吭々哧々)、吞々吐々、嗚嚕嗚嚕、喃々、結

々巴々

(3) 人に聞かれないように話すさま

日．ひそひそ

中．切々私語（窃々私語）、唧々咕々

以上挙げたものの各類別の有無を下表（表1）にまとめてみる。

表1

	A						B		C								
	(1)		(2)		(3)				(1)			(2)			(3)		
	＋	－	＋	－	＋	－	＋	－	＋	0	－	＋	0	－	＋	0	－
日本語	×	○	×	○	×	○	○	○	×	○	○	×	○	○	×	○	×
中国語	○	○	×	○	×	○	×	×	×	×	×	×	×	○	×	○	×

Aの(1)では日中両語がマイナス表現において数量的にもほぼ均等であるが、中国語の方がプラス表現に「侃々而談」、「娓々動聴」などがある。この類の中国語の表現には四字熟語が多い、そして擬態語がその構成要素になっている。

Aの(2)は日中両語ともマイナス表現で、しかも数量的にもほぼ等しいが、ニュアンスがやや違う。日本語は声が大きく、一方的にしゃべるような感じの表現が多いが、中国語は声が小さく、複数の人間がしゃべる場合にも用いられる。また、中国語の方は基本形の「ＡＢ」のままでも使われるから、基本形のままになっているが、勿論「ＡＡＢＢ」の形でも使われる。

Aの(3)では中国語が日本語にまさるほどに発達している。「嚕蘇」には幾つも別字があることなどはまさに中国語の擬態語の特徴である。

Bの「直接的」という項目に中国語は欠けているが、四字熟語でプラス表現として「一針見血」、「斬釘截鉄」、「直截了当」などがある。マイナス表現に「大言不慚」がある。なお、この項目の日本語の方のマイナス表現

はAの(1)にまたがるものである。

C類ではプラスでもマイナスでもない中性という項目を立てた。中国語は無口な様を形容するオノマトペがないことを除いてほぼ日本語と同じようだが、(2)の中の「呑々吐々」は飲み込んだり、吐いたりすることを話す様子に譬える表現で、隠喩といってもよさそうだが、臨時的な比喩と違って慣用的な四字熟語である。この「AABB」という畳語形式でしか使われないことや、本来の意味が薄れて、もっぱら「話す」ことに使われるのでここに入れた。(3)の「切々私語」であるが、「切々」(qie) はこっそり内緒話をする声を模写するものである。都合よく「こっそり」を意味する「窃々」と同じ発音だから、「窃々」という表記が段々普通になってきたが、また「切々私語」も見られ、『現代漢語辞典』にも「窃々」「切々」を両方載せている。字意にこだわる中国語であるだけに、こうしたルーズな使い方はまさにオノマトペであることを裏付けていよう。

表現上の特徴を知るべく、翻訳で調べたが[6]、スペースの関係でここで例文を並べることは省いてその一般的な傾向を二三挙げることにする。

まず中国語の「話す」に関するオノマトペはそのまま動詞として使われることが多い。例えば

○こそこそ話し合って……　嘀々咕々一陣（細）

○ぶつぶつと父親の耳の端へ来て呟いていた。　在父親耳辺嘟噥着（細）

○つべこべしゃべる　羅索一大堆廃話（氷）

勿論日本語のオノマトペでも「する」をつければ形態上動詞になることがあるが、「つるつるしている」とか「にこにこしている」とかのように「ABABしている」の形で状態、属性を表すことが多い。しかし、副詞

として動詞を補助的に特徴づけるのがここで取り上げた人間の行為に関するオノマトペの一般的な用法であるようだ。中国語は品詞と文法において形態変化のカテゴリーを持っていないことがここにも見られるわけである。

それから、無口な様を表すオノマトペを中国語は欠いているから、表情または説明調の表現でまかなうことが多い。例えば

○魚津はむっつりと言った。　　魚津绷着脸回答（氷）

○「読んだか、新聞は」とむっつりした口調で言った。　　語調是不和悦的（同上）

また直接的でプラス評価の表現に中国語では四字熟語を用いる。

○ずばりした感じでかおりは言った。（阿馨這句話、簡直是一針見血）

ほかに「一語道破」、「一句就説到点子上」などがあるが、いずれも数詞「一」の助けを借りている。

要するに「話す」に関するオノマトペ表現は日中両語ともかなり発達している。しかし全体から見ればマイナス的表現が多い。「口は禍のもと」という諺を共有する両国文化の共通点からもうかがわれるようにたくさんしゃべることはよいこととはされないようだ。

2．3　歩く

日中両語の「歩く」に関するオノマトペは、幾つかの着目点を立てて次のように示すことができる。

(1)　速度

①すたすた、すたこら、さっさ、たったっ、とことこ、とっと

騰々、沙々

②のそのそ、のろのろ、のっしのっし、しゃなりしゃなり

慢呑々、慢悠々

(2) 雑乱、無遠慮

①どかどか、どさどさ、どたどた、どやどや、どしどし、どたばた、だっだっ

忽々啦々

②ずかずか、つかつか、のこのこ

(3) 目的

うろうろ、うろちょろ、ぶらぶら

溜々達々

(4) 距離　てくてく

(5) 足元

とぼとぼ、えっちらおっちら、ひょろひょろ、よたよた、よぼよぼ、よろよろ、よちよち

蹣跚、踉蹌、趔趄（「AABB」型があり、畳韻擬態語である。）

顫々巍々（形容詞の生動形）、揺々晃々、跌々撞々（普通表現のAABB型）、東倒西歪（四字熟語）

中国語は「足元」の場合を除いてその表現に乏しい。同じ項目でも、日中両語ではそれぞれの表現レベルに違うものが多い。例えば(1)の中国語の「騰々」と「沙々」は足音に着目して元気のいい歩きかたや軽快な歩きかたに使われる。そして(2)の中国語の「忽々啦々」は大勢の人が歩く意味で日本語と一致しているが、どこかへ出入りするのではなく、しかもその足音が聞こえない場合でも、「遠処公路上忽々啦々走来了大隊人馬」（大通りの遠くから大勢の軍隊がやってきた。）のような使い方がなされる。

同じ表現レベルではどうなるかについて翻訳例を調べてみたが、ページ数の関係でここで全部挙げるのは無理だが、結論から言うと中国語訳はオノマトペになっているのは少ない。例えば、「どやどや……入ってきた」、「どかどか……入ってきた」は「蜂湧而入」、「一湧而入」と四字熟語になったり、「つかつか」は「径直」と一般表現になったりする。そして、次のような文の中国語訳は説明調である。

○……蛍狩り云うたら、ああいう風に友禅のべべを着て、しゃなりしゃなりして行かなんだら気分が出えへんねん。　（細）
……要捕蛍、就得穿這種印花和服、優雅地砕歩跑着。否則、就没有那種気分。

○……何か他人のやっていることを見ると、自分に関係がないことでも、黙っていられない。のこのこ出掛けて言って、一応自分の意見を吐くか、意見がなければ感想を述べる。
……別人做事、即使与己無関、我見了就無法袖手傍観、我会不顧自己的臉皮、走上前去発表一通自己的意見……　（氷）

勿論中国語訳がオノマトペになるものもある。「どたどたと足音がして……」は「呱嗒呱嗒的脚歩声」と、和服にげたという日本人のイメージから、げたの足音は中国人には「呱嗒呱嗒」と聞こえる。げたという名詞も中国語で「呱嗒板」（口語）と言うほどである。

なお、足元に着目した表現は手元にあるものにその用例が見つからないので、次は浅野の辞典の用例を筆者が訳したものである。

①日暮れの山道をいかにも疲れたという足どりで、老人がひとりでとぼとぼと下りてきた。

傍晩、老人精疲力尽、歩履蹣跚地独自一人下山来。

②酔っぱらいがひょろひょろとのれんをくぐって出てきた。

醉漢跌々撞々地（踉蹌着）出了店門。

③トラックからおろした引っ越し荷物をえっちらおっちら三階に運び上げる。

把从卡車上卸下来的行李趔々趄々地搬到三楼。

④痩せ細った老人が力なく、ひょろひょろ歩いてきた。

瘦弱的老人顫々巍々地走来。

⑤太っている上に、中風の気があるので足どりもよたよたしている。

肥胖加上又有中風、（他）走起路来摇々晃々。

⑥赤ん坊がこのごろよちよち歩き始めた。

小孩這些日子開始摇々晃々地走路了。

2．4　見る

日中両語の人間が外界を見る様子を表す擬態語はそれぞれ次のようである。

①きょときょと　②きょろきょろ　③ぎょろぎょろ　④じろじろ　⑤じろっ（と）

⑥まじまじ　⑦じーっ（と）

●$_1$ 直盯々（直愣々）　●$_2$ 眼巴々　●$_3$ 賊溜々（賊眉鼠眼）

眼球の安定度に着目すれば日本語の①～⑤は安定していない状態であり、しかもほとんどがマイナス評価のものである。⑥・⑦は「目を据える」状態であり、中立表現である。中国語の方はこれについての擬態語が少ない。●$_1$ は無遠慮に人を見るマイナス表現としては日本語の①～⑤とほぼ同じだが、目をずっと同じ場所にすえるさまである。●$_2$ も眼球の安定度が●$_1$ とほぼ同じだがほしいものが手に入らず、或は願いがかなえら

れず、ただ見ているさまを表し、気の毒な感じもある。●3 は眼球の安定度は①～⑤とほぼ同じだが、いい意味には使われない。

次に用例を挙げる。

①多分板倉が来ていないかと思ってキョロキョロしていたに違いないから……（細）

他一定是想来尋視一下板倉来了没有……

②「第一ボーイがあなた方お二人さんですか言うて、けったいな顔して、うちがビール持って来てほしい言うたかて、『えっ』と言うて、不思議そうにジロジロ見てるねん。…」

「首先那待役来問：『您是二位嗎？』一副感到奇怪的表情。我説：『請給我来点啤酒』他一辺応着「哎」、一辺不可思議地直愣々地盯着我。」（細）

③小坂は魚津の顔をじっと見入るようにしていたが……

小坂凝視着魚津的臉。（氷）

④すると、常盤はじろりと少しきびしい目で魚津を見返すと……（同上）

常盤這才転過臉来、帯着幾分厳厲的神色瞪了他一眼、

⑤人の顔をまじまじと見つめる。

目不転睛地看人。（簡析）

⑥かれは知らない所へ来てきょときょとする。（同上）

他来到一個生疏的地方、提心吊胆地四下環顧。

以上見てきたように日本語で副詞（擬態語）が用いられたところを中国語では動詞によって表されることが多い。勿論日本語にも例えば「見つめる、見入る、睨む、見まわす、見張る、見ほれる、見とれる、眺める」な

ど「見る」に関する動詞が少なくない。それに擬態語が加わることによって、感情的色彩、意味的評価がより細かくなされることになる。一方、中国語には上記の通り擬態語は少ない。対応するものでも日本語のそれとニュアンスが違う。用例②の「じろじろ」が「直愣々」に訳されるが、同じレベルの訳としてやむをえない。日本ではたえず眼球を動かすことが好まれないようだ。野元菊雄（1978）は日本では相手をあまり見るのは無作法として、伏目がちをつつましいとすると指摘している。それでも見たいのは「じろじろ」になる。中国では話相手を見るのは無作法とはされないようだが、知らない人をじっと見るのはよいこととしない。

2.5　食べる

日本語の「食べる」に関する擬態語及びその特徴は下表（表2）のようになろう。

表2

	ぱくぱく	むしゃむしゃ	がつがつ	もりもり
密度	＋	＋	＋	＋
評価	0	－	－	＋

中国語はこのような擬態語表現を欠いているが、盛んに食べる様子を形容する四字熟語の「狼呑虎嚥」がある。しかしこれも臨時性を失った比喩で、「声喩」といわれる擬態語[7]と違って、具体的なモノによって喚起される映像での比喩である。狼、虎を借りた比喩であるだけに、マイナス表現であり、大体「むしゃむしゃ」、「がつがつ」と同じ表現レベルのものである。他に中立表現の「大口大口」があるが、いずれも身振り表現である。これが身振りを音声的印象に移して表す日本語のオノマトペとは異なるところである。

終わりに

以上、人間の行為――笑う、話す、歩く、見る、食べる――についての日中両語のオノマトペの対照を行った。「話す」に関するオノマトペは中国語でも日本語におとらないほどにあることを3．2で明らかにした。「笑う」については中国語にあるものと日本語にあるものとは意味的重心が違うから、中国語では動詞或は形容詞の助けを必要とする。「歩く、見る、食べる」に関しては、中国語にあるのは限られたものだから、分析的、解釈的表現で間に合わせることが少なくない。即ち日本語の、明言しないで音声を聞き手や読者に伝えるという直接的な伝達方法と、中国語の、オノマトペを介しない直接的な伝達方法という両極が存在するのである。前者の「直接性」は聞き手の判断に譲る部分があるから、婉曲性に結び付くことがある。後者の「直接性」は即ちよく言われる中国語の具体性であろう。一方、文章或は会話を生き生きさせる役割においては、日本語のオノマトペは中国語では常に四字熟語になるのも興味深いところである。

注

1) 曹先擢（1980）「『詩経』畳字」『語言学論叢』6 北京大学 1980 商務印書館
2) 金田一春彦（1978）「擬音語擬態語の特徴」『擬音語、擬態語辞典』浅野鶴子 1978 角川書店
   鈴木修次（1978）「擬態語の中の漢語」『漢語と日本人』1978 みすず書房
3) 王力（1962）『古代漢語』上冊第二分冊　中華書局
4) 同注2)
5) この類については朱徳熙が「現代漢語形容詞研究」（1956）で「付加成分のある形容詞の複雑形式」としている。（『現代漢語語法研究』1980）
6) 用例出所
   周逸之　訳（1985）『細雪』　湖南人民出版社　（本文略称「細」）
   周明　訳（1984）　『氷壁』　上海訳文出版社　（本文略称「氷」）
   彭飛（1985）『日語擬声擬態詞簡析』商務印書館（本文略称「簡析」）

7)　中村　明（1977）「比喩のあらまし」より。『比喩表現辞典』角川書店所収

参考文献

浅野鶴子（1978）『擬音語、擬態語辞典』角川書店
鈴木修次（1978）『漢語と日本人』みすず書房
野元菊雄（1978）『日本人と日本語』筑摩書房
泉　邦寿（1976）「擬声語、擬態語の特質」鈴木孝夫編　日本語講座第四巻
『日本語の語彙と表現』大修館書店
呂叔湘（1956）『中国文法要略』商務印書館
王　力（1962）『古代漢語』中華書局　1978年版
朱徳熙（1956）「現代漢語形容詞研究」『現代漢語語法研究』1980所収
中国社会科学院語言研究所（1979）『現代漢語詞典』商務印書館

（大学院後期課程学生）